

## 多様な救護活動

誌名	畜産の研究 = Animal-husbandry
ISSN	00093874
著者名	太田,恵美子
発行元	養賢堂
巻/号	66巻1号
掲載ページ	p. 126-132
発行年月	2012年1月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター  
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council  
Secretariat



## 多様な救護活動－乗用馬の救護活動

太田 恵美子\*

3月の震災は本当に衝撃的な事柄でした。大きな地震の後の津波、そして福島原発の爆発と放射能の拡散。

被害は大きく複雑になってしまいました。

- ・地震のための施設崩壊 停電断水 交通網の寸断
- ・津波による施設崩壊 土壌の塩害
- ・原発事故による放射能汚染 健康被害 食品への不安 土壌の汚染
- ・また風評被害とは言い切れない馬のオーナーからの馬の移動希望
- ・余暇活動(乗馬活動)への家計からの予算の削減
- ・良い馬匹, 乗馬環境の喪失

東日本, 東北には沢山の馬と人がパートナーとして生きてきた場所があります。

特に相馬野馬追という壮大な祭りを1000年以上も守り引き継いできた福島県相馬地方には乗馬クラブではなく人と馬が普通に暮らしている風景がありました。年に一度の祭りのために自宅に馬を飼っている人, サラリーマンでも祭りのために馬を飼う人が珍しくありません。

また岩手は遠野物語で有名なように, 古くからの馬産地でもあります。

このような土地で被災地の馬関連施設が地震および津波により施設流失, 損壊, 繋養馬死亡, 受傷, また原発事故の放射能拡散による退避の影響を受けました。以下は全国乗馬倶楽部振興協会からの資料ですがこれ以外に, 土地柄, 自宅で馬を飼っている人, 連盟に加盟していない乗馬クラブの損害があります。岩手, 宮城, 福島内陸部の施設でも断水, 停電による人力での水汲み, ガソリンの欠乏などにより表には出てきませんが多くの被害がありました。また, 首都圏の乗馬クラブでも, ガソリンの供給不足により馬の移動制限, 飼料, 敷料の購入, 停電による影響, 断水, 交通手段の不安, 競技会の自粛など多くの不便が起きました。

馬という動物と人間の関係の特殊性として,

家畜, ペット, スポーツのパートナー, 営業ツールといった他の動物とは異なる多様な関係性があげられます。

大動物であり, 移動に労力があること, 飼育管理には餌と厩舎だけではなくスポーツホースには運動調教といった仕事も重要です。また精神的に繊細な動物で人とのパートナーシップも重要なことです。

放牧出来る場所があっても放射能を考えると放牧して良いのか, 結論はオーナー自身がするものですが, 乳牛が食べないほうが良い牧草(乳牛の牧草摂取制限と放牧制限)は, たとえそれが食用に供しない馬に与えるといっても実際に馬に食べさせて良いものなのか…。難しい判断を迫られるところです。

表 東日本大震災による乗馬団体の被害状況

全国乗馬倶楽部振興協会発表 平成23年4月25日現在判明分

名 称	被害状況
宮城県 奥松島乗馬クラブ	津波により水没。施設全壊。 10頭死亡。
乗馬クラブクレイン 仙台海岸公園	津波により水没。施設使用不可。 19頭死亡, 36頭生存。
名取乗馬苑ベルシー サイドファーム	津波により水没。施設全壊。 従業員1名安否不明。 38頭死亡, 2頭生存。
宮城県農業高等学校	津波により水没。畜舎全壊。 3頭死亡。
原町乗馬クラブ	津波により1棟水没, 畜舎全壊。 4頭死亡。
(相馬野馬追い関係)	約100頭が死亡, 127頭生存。
福島県立相馬農業高校	原発事故のため避難
大瀧馬事苑	原発事故のため避難
相馬ポニークラブ	原発事故のため避難
東北馬事センター	原発事故のため避難
日本中央競馬会福島 競馬場乗馬クラブ	原発事故のため避難
福島大学馬術部	原発事故のため避難
ヘレナ国際乗馬倶楽部	原発事故のため避難
ホライゾンスポーツホース	原発事故のため避難
栃木県 那須トレーニングファーム	驚いて壁に激突し1頭死亡。

\*顕著な被害があった施設のみ掲載しています。

\*現在のところ, 1件を除き人的被害は確認されていません。

\*上記以外にも, 沿岸部では津波の被害にあった馬が多数いるとの情報がありますが, 詳細は不明です。

\* Equine Facilitated Project (Emiko Ota)

## 震災馬の避難の一例

筆者は3月25日東北道の開通を待つ栃木県北部の鍋掛牧場を訪れました。

まだその頃は災害支援の自衛隊、緊急車両が多く走行し、一般自家用車はほとんど走行していませんでした。

鍋掛牧場には3月半ばに出産を控えた自馬の母馬がいたからなのですが、地震の影響か出産予定日を1ヶ月過ぎても全くその兆候が見受けられませんでした。

牧場に到着すると、鍋掛牧場は3月22日に仙台市乗馬協会と日本馬術連盟と全国乗馬倶楽部振興協会の馬の飼料などの搬入先となっており、支援物資や被災地から避難した人馬で騒然としていました。

普段は検疫厩舎として使用されていた厩舎に21頭の避難馬が入厩し、治療を必要としている馬は本厩舎に入厩し手厚い治療を受けていました。

乗用馬ハピネスラブは26歳、全日本馬術競技会などに出場し多くの選手を育てた功労馬でした。福島海岸から1kmのところにあった厩舎は全損し、壊れた厩舎から波と一緒に放り出された後、高台に自力で避難したところをオーナーに見つけられ、その後オーナーからの依頼で震災2日目に保護されました。寒い中長い間水につかり、逃げる途中で海水を大量に飲み肺炎を起こしており、骨折はしていないものの身体中に擦り傷、切り傷だらけでした。また精神的なダメージなのか、餌を食べることが出来ずアバラ骨が浮き出し腰も尖っていました。厩舎の隅で縮こまり、以前の姿を知っている人が厩舎の前を通っても見過ごしてしまうほど、ハピネスラブは雰囲気も身体も変わってしまいました。

鍋掛牧場に避難した馬のうち、長時間の移送がダメージを与える養老馬、扱いに技術を要する種牡馬を残し、現役競技馬は運動調整が出来る日本各地の乗馬施設に数日後に移送されました。

馬がいるということは幸せなこと、しかし、それは適切な運動と管理が必要であり時間を割かなくてはならないということでもあります。被災の現場にいる人にとっては重労働であり、時によっては他の支援活動に支障をきたすものでもあります。

福島原発地域に住む人は小さい頃からその利便性と危険について原発教育を受けてきたと言います。地震後、原発の低温停止が制御出来なくなった時点で危険を感じ、馬の移動を即座に決断しました。震災当日に馬を移動することを決断し、翌日ありとあらゆる馬運車に、軽油も手に入らなくなった中で試行錯誤する間もなく苦肉の末、灯油を馬運車に給油し海岸近くへ馬の救出に向かったと言います。生き残った馬を救出に向かう道中、ラジオや携帯からすぐそこにある原発が爆発したというニュース。車線も信号も何もかもが混乱した交通状況の中、津波警報のサイレンを聞きながらの運転、恐怖と時間と戦いながら馬運車になるべく多くの馬を積み込み逃げたそうです。

馬たちは事の大事がわかるかのようにおとなしく曳かれ馬運車に乗り込み、種牡馬、牝馬、ポニーの混載にもかかわらず大人しく移動されたということです。他にも震災後1週間ほどしてから生き残った馬達の救出に向かった方の話によると、普段は馬運車に乗りたがらない馬たちが我先にと馬運車に乗り込もうと殺到したそうです。よほど怖い思いをしたのでしょう。

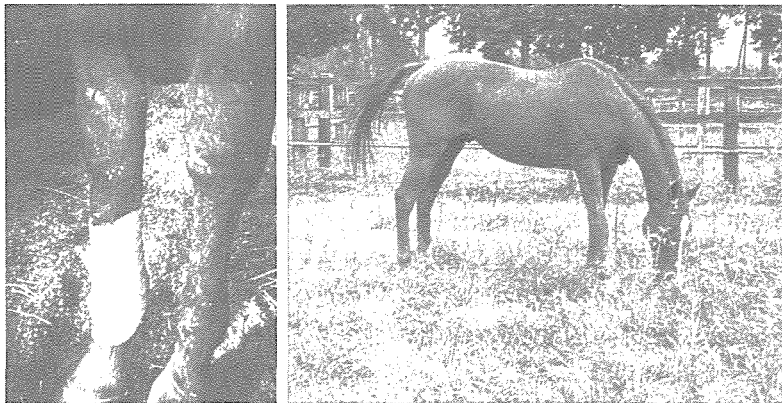


写真1 左：ハピネスラブ 疎開5日後の前脚 右：10月初旬、身体の傷は完治し疎開先の鍋掛牧場で余生を平和に過ごしています。

また馬の移動直後、近いうちに警戒地域に指定され立ち入り制限がかかることを予想し、馬具や家財道具の持ち出しに現地に戻ったとき、新しい馬具など状態の良いものは誰かに持ち去られていたという残念なことも起こっていました。

早い時期に馬の移動が出来なかった人は馬のために悩み、また、移動した人も悩みを抱えていた現実がありました。

まずは人命、でもそこにはどうしても割り切れない感情が生まれます。

## NPO 法人馬とあゆむ SOMA

相馬市を中心とする障がい児および地域住民に対して、治療的乗馬を通じた教育を行い、地域における福祉社会の充実に寄与することを目的とした団体です。

活動場所が相馬野間追祭りの一つの神社でもある中村神社にあることから早期に馬の支援、繋留を始めていました。

放浪馬の情報があると引き取りに行き、水や餌がない厩舎にそれらを配り、被害状況、被災馬の情報を受けて走り回ったが、馬を保護したところ勝手に馬を連れて行ったとオーナーから苦情を言われたりしたこともあったという。犬や猫のレスキュー同様の問題が起こっていました。

被災地の馬の世話をする人は大変な苦勞をしたが、被災者が避難した馬達がのどかにまどろむ姿を見て心が和む光景もみられたと言います。馬の持つ「癒し」の力がここでも発揮されていたのかもしれない。

良いと思われ最善を尽くしたとしても、立場の異なる人からは不平や不満を言われたり、陰口を言われることはこのような切迫した緊急災害時には大変残念だけれど仕方がないことなのかもしれません。

また、鍋掛牧場滞在中に福島と宇都宮大学の学生がトラックで支援用の餌を取りにきました。震災による直接的被害はありませんでしたが、放射能の影響を考え福島大学馬術部は宇都宮大学馬術部に3月18日から5月1日まで避難していました。震災後すぐに移動したくても、やはりガソリン不足の問題で困難であったが、その後日光東照宮の馬運車で移動することが可能となったと言います。

全国のホースマンが一丸となって、馬やその周りを援助しようというすばらしい連携がありました。

春休み中でもあり、馬の世話をするために馬術部に残った学生達も大変だっただろうし、福島地方に子供を出している保護者の方々の心労は計り知れないと思います。

## 再生への第一歩

### H×H プロジェクト(Human by Horse)

福島から栃木へ避難してきたホライズンスポーツホースの菅野氏は、助けたくても助けられなかった馬の命を思うと悲しみに沈みましたが、自分には調教技術があるのだからと再生へ向かって一歩を歩みだそうと、受け入れ先の栃木県鍋掛牧場の沖崎氏とともにこのプロジェクトを発足させました。

このプロジェクトは被災馬を含む引退競走馬を乗用に再調教し、セリにより購入者(受け入れ先)を決め、売上金を被災者と被災馬の再生の一歩にするというものでした。

このプロジェクトを立ち上げた二人は被災地のホースマンや中央競馬の調教師、乗馬クラブ関係者、馬具、飼料など乗馬関係企業にも依頼し多くの賛同を得ることが出来ました。被災地から駆けつけたホースマンたちは公開調教の騎乗を勤め、乗馬クラブ関係者、乗馬愛好家は購入者として参加し、また企業は仮設厩舎の貸与、スタッフユニフォーム、贈呈品の寄附など多くの協力が集まりました。

また多くのタイトルホースを排出している国枝厩舎、小松山厩舎からも乗用に向いていると思われる引退馬が寄贈され、プロジェクト立ち上げからなかなか天候に恵まれなかった3ヶ月足らずの準備期間中、10数頭のオークションに向けての調教が始まりました。馬に乗るといふホースマンにとっての本来の姿は、深い焦燥感の中で大きなやりがいとなったことは言うまでもないでしょう。また、再調教した乗用馬のセリは非常に珍しく、試行錯誤しながら手探り状態でセリの開催を迎えました。

渡良瀬北斗乗馬倶楽部楽部をオークション会場に、平日開催にも関わらず多くの方からの参加がありました。また、14頭の上場予定だったが、怪我等のため12頭の上場となりました。

馬術競技会ではなじみの関西の仕出し屋台が応援に駆けつけ参加者やスタッフのお腹を満たし、馬匹購入者には馬具屋から新しい馬着と馬具を、またオランダの飼料業者からは餌が提供されました。



写真2 H×Hプロジェクト オークション時の様子

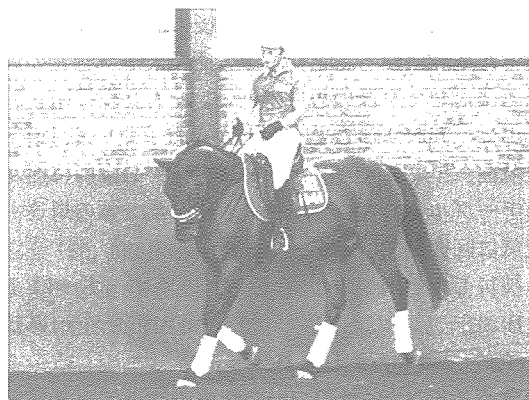


写真4 上：ホライゾンスポーツホース管野氏  
オークションライダーとしても騎乗  
下：H×H プロジェクトスタッフ



写真3 鍋掛牧場 震災後に産まれた子馬とタンポポの咲き誇る放牧地

震災後津波で何も無くなってしまった場所に初めて花をつけたタンポポ。その力強いタンポポが復興の象徴である、その思いを込めて試供用に寄附されたゼッケンやスタッフユニフォームには、緑色に鮮やかな黄色い文字で「H×H」と刻まれていました。

上場頭数 12頭  
取引成立頭数 6頭  
最高価格 1,160,000円  
最低価格 300,000円  
平均価格 810,000円  
合計販売価格 4,880,000円  
購買希望者数 23名  
参加者数 80名  
スタッフ数 23名



写真5 オークション最高価格で落札された  
ドリーミーペガサス

(通算戦績：中央競馬にて15戦4勝12入賞 獲得賞金9,057万)  
相馬野馬追用馬として飼育されていたが4月28日に鍋掛に原発立ち入り禁止区域から避難。震災後、給餌が満足でなく痩せていて、また牡馬2頭で放牧されていたため身体中傷だらけだったと言う。

宮城仙台のベルシーサイドファームは海岸から200mのところ、7,000m<sup>2</sup>の敷地がある乗馬クラブでした。震災により39頭の馬と3頭の犬を失い、震災後すぐに乗馬クラブに安否を確認しに行きたく

でも立ち入れない状態で、2日後に海に飲まれてしまった施設に戻ることが出来たと言います。どの馬たちに対しても深い思いがある。でも瓦礫に阻まれて馬体を回収することも難しかったと言います。

現在、宮城県秋保市の森林スポーツ公園内にベルステーブルとして再建し、生き残った2頭の馬達も元気に回復していると言います。

被災したベルシーサイドファームオーナーは H×H オークションでもオークションライダー(試技ライダー)として参加されました。

きっとまた、今後のホースショーなどでも活躍してくれることでしょう。

鍋掛牧場に移動してきた競走馬の厩舎は、当初栃木での営業を考えていたが原発事故の放射能を考慮して美浦トレセンよりも南に馬を預けたいという競走馬オーナーの意向で千葉に移動して営業再開しています。

それぞれが、それぞれの環境の中で避難し、不安が解除されて元の場所に戻り生活を立て直し始めたり、または新天地を求めて営業再開したところもあれば、まだ仮住まいであったり先の見通しが立たない方も居ます。

### 相馬野馬追関係

神事「相馬野馬追祭」その起源は、1千有余年以上前に遡り、平将門が関八州の武将を集めて下総国で行った軍事訓練(野馬を放して、その馬を敵に見立てての訓練)がその起源だと言われています。その軍事訓練が相馬でも行われるようになったのは、1323年に相馬重胤が小高に移住した時で、その訓練も再開したことからと伝えられ、昔の名残を留めている唯一の神事と言われ、古式にそったこの行事が国の重要文化財に指定される重要な要因になったとされています。

その特殊な地域性で乗馬クラブでなく自宅で馬を飼って1年に1度の祭りを楽しみにしていた人も多いのです。祭りに欠かせない馬たちが20キロの警戒区域内に取り残されていましたが、5月初旬に無事救出されたことはニュースでも報道されたことご存知のことでしょう。その際、1頭ずつ放射能検査を受けすべてに被爆の問題は無かったという。しかし、風評として震災直後に、獣医から「福島から

の馬を受け入れたら競技会に出られなくなる」などのデマが飛び交った事実もあります。

この警戒区域からの馬の移動は色々と困難な問題があったが、結局、農林水産省は南相馬市の馬については、同市の伝統行事である相馬野馬追に用いる馬として

- ① 公益性があること
- ② 研究用以外の家畜生産および食用に利用しないこと
- ③ 公的機関が責任を持って家畜を監視すること。

等の条件の下で、特例的に区域外への移動が認められたものでした。

馬を無事に引き取ることが出来た人も、その反面で同じ地域の牛ほか畜産農家の人たちの苦しみを思うと単純に喜べる問題ではなかったと言います。

今年の相馬野馬追祭りは、当初開催が危ぶまれたため、相馬中村神社・相馬太田神社・相馬小高神社・宇多郷騎馬会・北郷騎馬会・中ノ郷騎馬会・小高郷騎馬会・標葉郷騎馬会と、この伝統ある馬事文化を継承していくために検討を重ねました。本年においては震災によってお亡くなりになられた方の鎮魂を祈り願い、更には相双地方の復興のシンボルとして「東日本大震災復興 相馬三社野馬追」と称し実施しました。

7月23日は相馬中村神社を中心としながら宇多郷騎馬会・北郷騎馬会の行事となり、7月24日はメインである御行列・甲冑競馬・神旗争奪戦実施は出来ませんでした。相馬太田神社を中心としながら中ノ郷騎馬会の行事となりました。

7月25日には相馬小高神社(実施場所は多珂神社)を中心としながら小高郷騎馬会・標葉郷騎馬会の行事となりました。

しかし7月24日と25日の行事においては、東京電力福島第一原子力発電所から半径20キロ～30キロ圏内の緊急時避難準備区域である神社で実施することから、観覧を勧められないとの事前の告知がありました。

支援には多くの団体、個人が尽力し今も継続しています。

大学馬術部や農業高校でも連盟などの協力により避難の受け入れが行われました。また、その他乗馬クラブ間での一時避難受け入れなども行われています。

## 主な団体の支援

日本馬術連盟 <http://www.equitation-japan.com/>  
14,593,027円(6月30日)の義損金を集め200万を飼料代に、また13の連盟関連施設に配分をしたという。(5月23日)その他、登録料の免除などを行っているが被災した方が想像以上に多く、配分には苦慮している様子です。義損金の受付期間を9月末まで延長しています。

全国乗馬倶楽部連合協会 <http://www.jouba.jrao.ne.jp>  
12,814,695円の義損金を集め緊急支援物資購入費また見舞金、飼育補助、乗馬などを通じた被災地支援(馬とのふれあい)事業を予定しています。

被災馬インフォ <http://rha.or.jp/hisaiba-info/>  
引退馬協会 <http://rha.or.jp/>

乗用馬、乗馬クラブの安否確認また救済には乗用馬の世界もインターネットが大いに活用されました。電話で連絡が取れない仲間ともmixiやfacebookで安否を確認された方もおられたでしょう。筆者自身、インターネットが安否確認に活躍した実感があります。

引退馬協会がいち早く開設、運営している被災馬インフォは、英語バージョンのホームページとtwitter開設など、素晴らしく迅速な対応と更新をしていました。

対象になる馬の種類区別なく、ポニーから乗用馬、引退馬、相馬野馬迫いの馬と幅広い支援をしています。

救助された馬に鑑識があるわけではなく、写真の掲載が出来るホームページは持ち主の確定に有効に利用されたと思われます。飼料支援、スタッフ派遣、施設借り上げ、救済した馬の譲渡支援活動、ワクチン接種ほか獣医医療活動など、民間のネットワークを利用したフットワークの良い活動をしています。

### 海外からの支援

海外からも欧米、オセアニアを含め飼料の支援、馬具の提供など多くの暖かい援助がありました。

### ハツオフ計画(Hats off)

米国在住の吉田直哉さんが発案し、海外のサラブレッド産業界有志による東日本大震災および福島原発で苦慮に立たされている福島県の日本古来の馬事文化存続、震災遺児の教育資金支援を目的とし

て計画された活動で、日本以外のサラブレッド生産国、或は競馬開催国の競馬事業体、関係者から提供されたデザイン帽子をプロジェクトに賛同する方に申し込んでもらいその収益金を支援に充てました。

他の義損金と合わせて総額9,329,521円は南相馬市3,642,000円 岩手県庁(学びの希望基金)引退馬協会150,000円寄附されました。(6月30日現在)またその後も盛岡、笠松競馬でもイベントを行い義損金は上記団体および宮城県の遺児支援団体に送金予定とのことです。

### 民間乗馬クラブの活動

いち早い支援をとということで、関東にある乗馬クラブが会員の協力、乗馬クラブスタッフブログなどでの呼びかけにより、災害支援の東北道の通行許可証の取得など多くの問題を解決し、馬輸送車数台分の物資が仙台へ運ばれました。

また集まった義損金およそ6,500,000円は支援物資と輸送費また東北の乗馬施設へ直接振り込まれました。ホースマン同士の心意気を感じさせた活動でした。

### Act For Japan

全国の馬術競技者達が震災に対する支援の気持ちを持ち続け、そして気持ちを1つにして継続していくことが大事であり、この想いを全国の競技者に浸透させ、被災地以外で薄れつつある大震災のことを、定期的に思い出してもらえるようにすることを目的に活動しています。8月から義損金をくださった方に、ピンバッジとロゴステッカーを渡し支援している証として身に付けてもらいました。なおその義損金は日本馬術連盟に寄附されます。



写真6 那須トレーニングファーム 競技開催時の被災地支援ブース

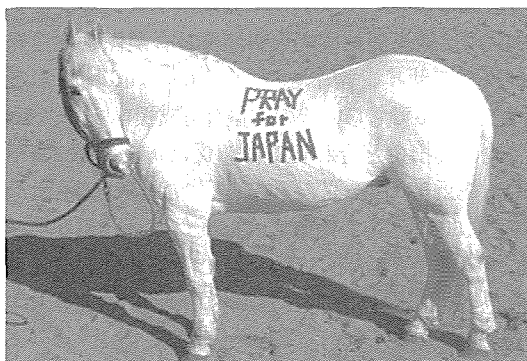


写真7 この震災が馬業界に与えた影響は本当に大きく、いつになったら平常の生活に戻るのか分かりません。

その他、震災後の競技会では積極的に被災地応援のための義損金の募集、そのためのブース、また入賞賞金の義損金への申し出や、また復興乗馬イベントも積極的に開催されています。

#### 北海道などへの馬の疎開

日高市は南相馬市から9頭の市民所有馬を8月8日に福島県の家畜保健所の放射能被曝の有無を確認するスクリーニングテストを行い法理牧場へ移動しました。経費は日高町が2/3 また当初の自己負担分をダーレージャパンが義損金として寄附をすると言い、日高町は36頭の馬を南相馬市から受け入れる予定を立てていたと言います。

#### 馬というのは家畜なのか ペットなのか？

乗馬クラブの営業にはお客様の来場がなければ成り立ちません。

風説とは言い切れない福島地区の放射能汚染問題。岩手、福島、茨城、栃木の古くから馬産に適していると認められた土壌の汚染。

主に乳や肉が食用となる牛は厩舎飼いを決定されたが、放射能を含んでいる場所だとしても放牧され、運動し、草を食むことがどれだけ馬にとって重要なのか。そして、馬に助けられた人々の心。

#### 今いる馬たち、生き残った馬たち。

疎開先の栃木県鍋掛牧場で、福島から避難してきた母馬に子馬が生まれました。

新しい命が脈々と、今日も着実に育っています。馬との生活は毎日同じことの繰り返しです。しかし同じ日は一日もありません。

そんな中で、明日への希望を見だし、今は難しくても出来ることならばいつかは住み慣れた土地に戻りたいというのが一番の望みでしょう。

いつの日か、その時がくることを切望しこの災害を忘れずに出来ることを少しずつ行っていかなくはなりません。

「災害に対して準備すること」FRDI が被災に関して以下ページに書かれているので参考に。

<http://www.frdi.net/pdfs/Newsletters/May2011.pdf>

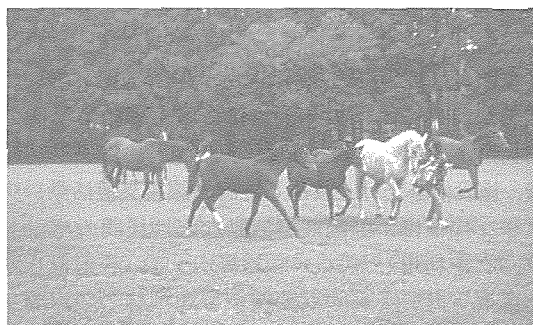
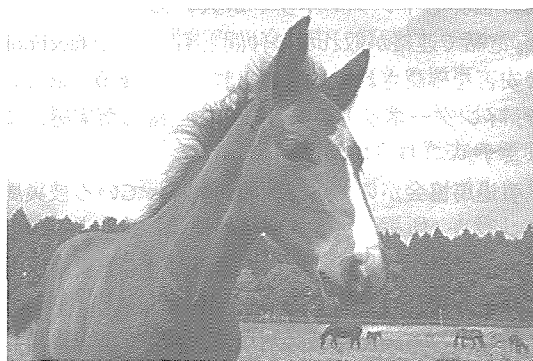


写真8 栃木県鍋掛牧場 放牧中の親子馬達